

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01762

研究課題名（和文）自他の類似性理解が拓く社会的認知発達過程の解明：生後9年間の縦断研究を通して

研究課題名（英文）Research on the developmental process of social cognition based on understanding similarities between self and others: A longitudinal study in the first nine years of life

研究代表者

實藤 和佳子（SANEFUJI, Wakako）

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：60551752

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,100,000円

研究成果の概要（和文）：他者から提示される情報を子どもはどのように自身の中に取り入れていくのか、その発達と関連要因に関する研究成果を公表した。その結果、幼児は、置かれた状況の中で必要とされる側面を持っている人物を選択し、状況に応じて信頼判断の基準を切り替えることができたことを明らかにした。幼少期に受ける養育スタイルは他者からの情報に対する批判的思考態度の発達と関連しており、optimal parentingにおいて批判的思考態度が高いことを示した。他者の行為を観察するときはその意図性について考えており、一連の行為の中に他者の意図が読み取りにくい行為が含まれるとき、幼児は儀式的な行為の一つとして模倣した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、他者が提示する情報に対する幼児の受け取り方や他者の行動を模倣学習する基準について発達の観点から明らかにしたと同時に、幼少期の養育スタイルの影響について特定できたことに学術的意義がある。これらの知見は、幼児期における他者とのコミュニケーションのひな型を示すものであり、自閉症スペクトラム障害を含めた社会的認知発達の個人差の理解ならびに発達支援に関する検討を進めていく上で有用であることに社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：We published a series of research results on the development and related factors of how children internalize information presented by others. The results revealed that young children were able to select a person who had the aspects they needed in the situation and were able to switch their criteria for trustworthiness depending on the situation. The parenting style received in early childhood is related to the development of critical thinking dispositions towards information from others, and it was shown that critical thinking dispositions are high in optimal parenting. When observing the actions of others, they consider their intentionality, and when a series of actions includes actions in which it is difficult to discern the intentions of others, young children imitate them as part of a ritual action.

研究分野：発達心理学

キーワード：社会的認知 縦断研究 発達 類似性理解

## 1. 研究開始当初の背景

私たちが他者を理解できるのは、他者を自分に似ている存在として暗黙裡に認識しているからかもしれない (Cooley, 1998; Mead, 1967)。古典的な発達理論では、発達早期は自己と他者の間の類似性に気づいていないとされていた (Freud, 1911; Mahler, Pine, & Bergman, 1975; Piaget, 1952)。しかし、近年の発達研究の急速な進展により、他者を自己との類似性からみる捉え方はヒト固有の生物学的適応の結果であり (Tomasello & Call, 1997)、生まれたときから原初的に理解している (Decety & Chaminade, 2003) と仮定されるようになった。発達初期における自他の類似性理解がその後の社会的認知の発達を支えることは研究者間で一定のコンセンサスが得られている。

しかし、乳幼児期における自他の類似性理解のあり方や社会的認知発達とのつながりについて、実証に乏しいことが問題とされてきた。乳幼児が示す同月齢児 (Sanefuji, et al., 2006) や自己と同じ移動形態を表すバイオリジカルモーション (Sanefuji, et al., 2008) への選好、模倣への選好 (Gergely, 2001)、自他理解とミラーニューロンとの関連 (Gallese, 2005) に関する知見も併せれば、発達初期に自他の類似性を見出している証は得られてきていると考えられる。一方、自他の類似性理解とその後の社会的認知発達との関連に関する実証研究は見当たらない。自閉症スペクトラム障害 (以降、ASD) 児に対する自他の類似性理解をベースとした社会的認知発達領域における介入効果 (Sanefuji, et al., 2009; Sanefuji & Ohgami, 2013) を通して、後続する社会的認知発達への影響も認められる。しかし、検証は ASD 児における限定的な発達指標における数ヶ月間の発達の变化に留まっているため、定型発達における自他の類似性理解と社会的認知発達との関連性は不明である。更に、長期的に発達を俯瞰する場合、社会的認知発達のどの側面に自他の類似性理解が影響を及ぼしていくのか、未だ解明されていない。特に、自分とは異なる他者の心的状態の理解を問う「心の理論」の起源について、仮説の一つには自己の心的状態を他者に投影することで理解するシミュレーション説があり (Apperly, 2008)、自他の類似性理解が他者の心の理解と関連する可能性が想定される。

自他の類似性理解と「心の理論」を含めた社会的認知発達の関連の実証的解明は、他者の心の理解へ至る道筋の特定につながっていくものと期待される。

## 2. 研究の目的

本研究では、主に9歳までの社会的認知発達について複数の指標から捉える。研究参加者の中には、本研究期間より前から継続して研究に協力して下さっている参加者も多い。そのため、そのようなケースにおいては、保護者の同意のもとで本研究期間以前に収集したデータも利用し、発達初期における自他の類似性理解がどのように影響して「心の理論」を含めた社会的認知の発達へつながるのかを縦断的に検討する。また、関連が示唆される他領域 (認知や学力、生活リズム (睡眠の特性)、発達環境等) の発達についてもデータを収集し、相互にいかに関連しながら社会的認知が発達するのか、そのプロセスを包括的に解明する。更に、ASD 発達や臨床的問題の発生も視野に入れ、自他の類似性理解が現実としてどのような発達の帰結に結びつくのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

対象児を対象に、語彙や ASD 症状に関する発達検査や社会的認知の諸現象に関連した行動実験・言語による課題をおこなう。また、保護者を対象に、適応状態に関するインタビュー、睡眠の特性や日常生活に関する質問紙をおこなう。保護者の同意のもと、対象児の担任 (保育士・幼稚園教諭・小学校教員) を対象に、学力、対人トラブル、適応状態、教育・支援環境に関する質問紙をおこなう。

## 4. 研究成果

縦断データについては引き続き分析を継続しているが、社会的認知発達領域においては複数の知見をすでに公表してきた。本研究期間中に公表した研究成果は下記のとおりである。

まず、コミュニケーションや学習などの場面において、他者からの情報をどのように受け取るのかに焦点を当てて、その発達と関連要因に関する検討をおこなった。

### 他者からの情報の選択的信頼について

これまでの研究では、子ども達は信頼できる他者を情報提供者として選ぶことが示されてい

る。しかし、子ども達が他者の不正確さの理由を考慮するかどうかは不明であった。本研究では、2名の不正確な情報提供者を提示した。具体的には、ある情報提供者は目隠しをしていたため不正確だったが、もう1名の情報提供者は明らかな理由もなく不正確であった。子ども達の選択的信頼について検討したところ、子ども達はどちらの情報提供者にも選好を示さなかったことが明らかになった。また、他者が不正確な情報を提示する場合、6歳までの間にその人がなぜ不正確であるか(例えば、何らかの理由で正確な情報を得られていないのか、それとも、明らかな理由もなく単に不正確なのか等)を考える認知能力は発達すること、しかし、不正確な回答を他者がおこなっている理由の理解に基づいてどのように情報を受け取るかを考慮しているわけではなく、正確さの程度によって他者からの情報を信頼するかどうかが決まることを明らかにした。この発見は、子ども達は誰を信頼するかを選択する際に、情報提供者がなぜ不正確であるかを考慮していないという主張を裏付けている。

さらに、子ども達は他者の知識と親切さを信頼判断の基準として用いることが明らかになっているが、多様な状況の中でこの基準を使い分けているのかはまだ明らかになっていなかった。そこで、本研究では子ども達が状況に応じて信頼の基準を変更しているのかどうかを調査した。具体的には、知識はあるが親切ではない人物と親切だが知識のない人物を提示し、知識が必要となる状況と親切が必要となる状況での信頼判断を調査した。加えて、選好が信頼に与える影響を検討するために、子ども達の各登場人物に対する選好も調査した。その結果、置かれた状況の中で必要とされる側面を持っている人物を選択し、状況に応じて信頼判断の基準を切り替えることができた。さらに、知識が必要となる状況での子ども達の選好はチャンスレベルであるが、親切さが必要となる状況では有意に親切な人物を選択した。子ども達は有意に多く親切な人物を選好したが、選好した人物によって質問への回答の傾向は変化しなかった。以上の結果より、子ども達は状況によって信頼の判断基準を変更しているが、親切さには幼い時期から敏感であること、選好判断においては親切さが優先されるが、この選好は子ども達の信頼判断に影響を与えないことが明らかになった。

#### **他者からの情報に対する批判的思考態度について**

批判的思考は、学校教育に関連してよく議論されてきた。しかし、これまでの研究を考慮すると、家庭環境も自尊心への影響を通じて批判的思考態度に影響を与えようとするかもしれない。例えば、先行研究において、ブルジョア階級や上流階級の家庭の生徒は、下層階級の家庭の生徒に比べて批判的思考に優れていることが示されている。養育者の習慣や行動が批判的思考態度にどのように影響するかは焦点を当てた研究はほとんどないため、養育者の要因の影響は不明のままである。批判的思考態度が養育者の要因によってどのように影響を受けるかを明らかにすることが求められている。

また、自尊心について、考え方や学力等の個人の生活のあらゆる側面に影響を与える。批判的思考態度は性格や考え方と関連する領域であるため、自尊心が影響力のある要素であると想定される。しかし、これまでのところ、自尊心と批判的思考態度との関係を調査した研究は見当たらない。

そこで、児童期までの家庭環境が批判的思考態度に及ぼす影響を明らかにするために、質問紙を用いて、批判的思考態度、自尊心、および児童期までに受けてきた(と子ども自身が考える)養育者の養育スタイルとの関連性を調べた。その結果、他者からの情報に関する批判的思考態度の関連要因として幼少期に受ける養育スタイルがあることが明らかとなり、具体的には、Optimal parenting(高いケアと低いコントロール)の養育を受ける場合は、Affectionless control(低いケアと高いコントロール)の養育を受けた場合より批判的思考態度が高いことを示した。さらに、肯定的な自尊心は、養育者の養育から批判的思考態度へのプロセスにおける仲介因子であったことも明らかにした。これらの知見は、家庭での養育から批判的思考態度への経路に関する最初の証拠を提供したと言える。

また、他者とのやり取りにおける他者の心(意図など)の読み取りについて焦点を当て、検討をおこなった。

#### **他者とのやり取りにおける意図性の読み取りについて**

私たちは幼少期から他者とのやり取りの中で様々な行動を模倣するが、大人になっても起きやすい模倣の対象の一つに儀式的行為がある。儀式的行為の中にはどのような意味・意図を持って当該行為がなされるのか、その背景が分かりにくい行為も含まれることから、goal demotionとの関連について指摘されてきた。Goal demotionとは、当該行為を行為者がなぜおこなったのか、その理由や動機が理解・推測できないことを指す。今回、goal demotionを引き出す要因として、実際的には最終ゴールとは無関連である行為の提示順番を操作した。例えば、行為の最終ゴール前におこなわれる行為はゴールと何らかの関連がある可能性を想定することができるが、最終ゴールの後におこなわれる行為はゴール自体がすでに達成されているため、ゴールとの関連を推測することができない。このため、最終ゴールが達成された後に行為が提示される場合は行為者がなぜそれをしたのかについて推測できず、その行為をすること自体を目的の一つ(儀式的行為の一つ)として考え、模倣する可能性がある。

そこで、子ども達を2群に分け、最終ゴールとは無関連な行為をゴールの前(before条件)かゴールの後(after条件)に提示したところ、ゴールの前よりゴールの後に無関連な行為が提示さ

れた場合により多くの模倣が観察された。この結果から、一連の行為の中に他者の意図が読み取りにくい行為が含まれるとき、幼児は儀式的な行為の一つとして模倣した可能性について明らかにした。これらの知見は論文で公表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Miyoshi, M., & Sanefuji, W.	4. 巻 31
2. 論文標題 Focusing on different informant characteristics by situation: The dimensions of benevolence and competence in children's trust judgment	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Social Development	6. 最初と最後の頁 1231-1239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/sode.12598	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村知靖・実藤和佳子・大神英裕	4. 巻 33
2. 論文標題 乳幼児期における社会的認知能力の発達軌跡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 304-313
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 170
2. 論文標題 「非認知能力」なるものの発達と教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 27
2. 論文標題 乳幼児期の社会情動的発達を支え促す環境のあり方とは	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 33
2. 論文標題 発達連続性と変化を問うということ：アタッチメント縦断研究に見るアボリア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 193-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Taniguchi, Y., & Sanefuji, W.	4. 巻 30
2. 論文標題 Irrelevant actions, goal demotion and explicit instruction: A study of overimitation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Infant and Child Development	6. 最初と最後の頁 e2227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/icd.2227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 166
2. 論文標題 他者と関係を結ぶということ：ジョイントネスとアタッチメント	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 771
2. 論文標題 アタッチメントと心の発達	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 特別支援教育研究	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miyoshi, M., & Sanefuji, W.	4. 巻 62
2. 論文標題 Young children's selective trust: Does seeing indicate knowing?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Psychologia	6. 最初と最後の頁 197-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2117/psychoc.2019-A011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Wang, Y., Nakamura, T., & Sanefuji, W.	4. 巻 37
2. 論文標題 The influence of parental rearing styles on university students' critical thinking dispositions: The mediating role of self-esteem	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Thinking Skills and Creativity	6. 最初と最後の頁 Article 100679
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.tsc.2020.100679	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 20
2. 論文標題 「情の理」論：感情の中に潜む合理的なもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 262-265
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤利彦	4. 巻 163
2. 論文標題 「非認知」の中核なる感情：それが発達にもたらすもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 2-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 実藤和佳子
2. 発表標題 自己との類似性への好みが拓くこころの初期発達
3. 学会等名 第1回自閉症学超会議（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 実藤和佳子
2. 発表標題 自他の類似性理解が拓くコミュニケーション
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第20回学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷口雄紀・佐々木彩香・実藤和佳子
2. 発表標題 幼児のOverimitationにおけるユーモアな行為の効果
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村知靖・大神英裕・実藤和佳子・山下洋
2. 発表標題 3歳児向け自閉症スペクトラム障害スクリーニングテストの開発
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年



〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	中村 知靖  (Nakamura Tomoyasu)  (30251614)	九州大学・人間環境学研究院・教授   (17102)	
研究 分担者	遠藤 利彦  (Endo Toshihiko)  (90242106)	東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授   (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------